

北斗句会（1月）選句

令和3年1月12日

宮下ひかる

特選

NO. 4 老ひの身に喝をくれるぞ初日の出

期待を込めて眺めるからこそ、喝を感じ取り、詠み人の気合いが感じられ、気分爽快。正月に相応しい。

選

NO. 13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

鬼滅の刃の「人間は老いて死ぬ人間の儂い美しさ、愛しさを歌留多取りに感じるとは素晴らしい」今風のセンスかな！！

NO. 17 去年今年新たな夢や老い忘れ

大晦日、元旦と一日で新たな夢に身を置き、老いを忘れる心境。素晴らしい。夢や、でなく、夢に、と直接に、直感したいところ。

NO. 31 賀状受け今年も元気安堵する

世間に我が身の存在があり、お互いに、元気で居たよと安堵する雰囲気。これこそが年に一度の確かめ合いの儀式が大切と思います。

NO. 36 冬麗やメタセコイヤの三角錐

ふゆうらら！！と古代種のメタセコイヤの三角錐がマッチングしている。ふゆうらら、の雰囲気になり、メタセコイヤを眺め、や、を省きたい。

深見十万

特選

NO. 7 「賀客然慣れぬ正座の子等の貌」

選

NO. 5 「継続の・・・」の句

NO. 24 「床の間の・・・」の句

NO. 27 「朱の雲や・・・」の句

NO. 36 「冬麗や・・・」の句

藤田紀潮

特選

NO. 28 愛犬と別れの朝や息しろし

冬の日の朝、長年にわたり癒しの時をくれてきた愛犬がとうとう天命をつきようとしている。

や切れと「しろし」の仮名表記で、作者の悲しみと慈しみが切々と伝わる。

選

NO. 4 老いの身に喝をくれるぞ初日の出

平明。中七が力強く、元気が充満している句。

NO. 5 「継続」の一語は楷書初日記

楷書で書かれた継続の二文字に今年への意気込み。諧味。

NO. 10 無造作に柳葉魚を喰ふ五六本

柳葉魚をたべる所作や本数を適切に表現しており、この中7を他の魚に置き換えることは出来ない。

NO. 34 何為さば妻喜ばむ三日過ぐ

正月、少しでも喜ばせようと病床の妻を労わる景が浮かぶ。

森田光彦

特選

NO. 2 達磨市願いに見合ふサイズ買ふ

措辞「願いに見合ふサイズ」が、読者にいろいろ想像させて、面白い。

選

NO. 6 数へ日の一時過ごす理髪店

忙中閑ありが、見事に詠まれています。

NO. 7 賀客然慣れぬ正座の子らの貌

子供を躡けている親、黙って従っている子供の困惑した態度・表情が見事に詠まれています。「貌」の字から、それがよく読み取れます。

NO. 19 飛行機雲わけゆく宙の淑気かな

正月の朝の真っ青な空を飛行機雲が分けて進む状況が良く解ります。

厳かな中にすがすがしさを感じます。

NO. 28 愛犬と別れの朝や息しろし

数年前、愛犬が死んで、庭に埋め葬った時のことを思い出しました。

まさにこの句の通りです。成仏を願う心が「息しろし」から読めます。

田中資凡

特選

NO. 29 降りてこよ言の葉ひとつ冬銀河

冬銀河の空を眺めるにつけ、ふと、「降りてこよ言の葉ひとつ」と、作者の眩きというか思いが、そのまま句となっている叙情の佳句。

選

NO. 5 「継続」の一語は楷書初日記

中七の一語は楷書の措辞が巧み。楷書そのものに力があり、初日記に当たっての心意気を十分に連想させる。

NO. 13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

歌留多取る手先に焦点をあて、その素早さを鬼滅の刃と例えたのは巧み。今年の正月の句としては頷ける。正月の家庭の賑わいを彷彿とさせる。

NO. 26 足裏を陽に曝して日向ぼこ

陽と日向ぼここと畳かけた表現が巧み。足裏を太陽に曝すとはどのような姿勢なのかと想像させ面白い。

NO. 42 日向ぼこあれほれそれの苦笑ひ

中七のあれほれそれの措辞が巧みで面白い。日向ぼこをしていると、自然と、取り留めのなき想念に引き込まれるのであろう。その様を笑っているのだ。

長池豆陽

特選

No. 1 2 日めくりの元旦の文字大きくみえ

巣ごもり生活は時間感覚も鈍る惰性的日々。だが、日めくりの元旦の文字を見て、日本人古来の感覚が覚醒。心の動きの切り取り方、下五の連用形での締めも巧み。

選

No. 1 0 無造作に柳葉魚を喰ふ五六本

柳葉魚は大体個人ごとに小分けされ、遠慮や気遣いも無用。無造作に一気に五六本も食べてしまった平凡で平穏な日常。緊迫感がみなぎる現世情への諫め。早くそうありたい。

No. 2 1 しわぶき一つ妻二つ変わりなし

強い絆の夫婦はしわぶきさえ意思疎通のモルス信号。夫婦とはかくありたいもの。

No. 3 6 冬麗やメタセコイヤの三角錐

メタセコイヤの端正でまっすぐ伸びた落葉の姿は、凜とした冬晴れの空によく似合う。

No. 4 1 緑内障初日の景の狭まりぬ

緑内障は視野が次第に狭くなっていくが治療の難しい病。詠者は、折角の初日さえ視野が欠ける重い症状。なのに、その不安を打ち消すように淡々と詠む。心情が辛い。

太田黒 幸風

特選

NO、13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

今流行りの鬼滅の刃を取り入れた器用な句である。

選

NO、5 「継続」の一語は楷書初日記

元日早々、今年こそは日記をつけるぞという、意気込みの感じられる句である。

NO、7 賀客然慣れぬ正座の子らの貌

親類の家に年始参りに来た子供らの神妙にしてお年玉を狙っている貌が良く表れている。

NO、24 床の間の軸は富士山淑気みつ

正月らしいめでたい富士を掲げた床の間の雰囲気であらわされている。

NO、27 朱の雲や忘れものめく冬の暮

朱く染まった夕焼けに何かしら感じる感覚を、忘れ物したようなと表現したところが共感を呼ぶ。

大崎石州

特選

NO, 32 初みくじ神の仰せを蝶むすび

多分、大吉だったのだろう、ニンマリしながら梢に蝶結び。
中七の「神の仰せ」が良い。

選

NO, 9 元旦の晴れ福多き世の予感

七五五、破調の句。コロナ禍で気が滅入っている巷。
このような句が出るのがうれしい。

NO, 14 八十の身の嵩となりたる賀状かな

致し方ないかとの思いに、そこはかたなく寂しさが漂ってくる。

NO, 15 ひらがなに牛の絵付きの賀状かな

曾孫からの年賀状だろうか、嬉しさがじんわり伝わってくる。

NO, 22 初風呂や老化を洗う感強し

全く同感！

山縣秀雄

特選

NO. 18 赤べこや賀状の束に群れをなし

コロナ除けの赤べこが今年の年賀状に多くあり、下五で上手く状況を表現している。

選

NO. 2 達磨市願いに見合ふサイズ買ふ

達磨市でどのサイズにするか迷うが、中七はこの心理状況を上手く表現している。

NO. 5 「継続」の一語は楷書初日記

日記の継続は難しく初日記に決意を秘めた「継続」の一語の楷書がピタリと効いている。

NO. 32 初みくじ神の仰せを蝶むすび

神の仰せを作法通りに下五の蝶むすびにしているのが良い表現である。

NO. 42 日向ぼこあれほれその苦笑ひ

日向ぼこの日常的な事柄を中七で対比させており、下五が共感を憶える良い表現である。

大森康正

特選

NO. 18 赤べこや賀状の束に群れをなし

下五により絵の赤べこに生命が宿り、連想を豊かにさせた。「群れをなし」がユニーク且つ絶妙。

選

NO. 13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

歌留多取りの手捌きをアニメ化すれば、同様な筆触となろう。発想が新鮮。

NO. 15 ひらがなに牛の絵付きの賀状かな

賀状、幼児、作者の様子が窺える。同時に、家族の絆の温もりも感じられ、心暖まる。「ひらがな」が物語のキーワード。

NO. 32 初みくじ神の仰せを蝶むすび

行為そのままを素直に詠った。「神の仰せ」により、句に敬虔な雰囲気が高まった。

NO. 36 冬麗やメタセコイヤの三角錐

晴れた冬空に施された刺繍のような立木の景。「三角錐」と言い切ったことで凜々しい句となった。

竹内雲泉

特選

NO. 42 日向ぼこあれほれその苦笑ひ

暖かい日、陽だまりで世間話。年寄りの噂話か？

「日向ぼこ」の本姿を描いて素晴らしい。

選

NO. 7 賀客然慣れぬ正座の子らの貌

日頃はやんちゃな子、正月は畏まって正座。この句の焦点は「貌」。

この場合、「カオ」ではなく「ボウ」と発声するのでしょうか。

NO. 10 無造作に柳葉魚を喰ふ五六本

この時期、高級魚のシシャモ。五本も六本も無造作の食べたとは。

本当のところは、大切にじっくり味わったと思います。洒落？

NO. 13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

歌留多遊び、でも勝負事はつい真剣になります。

いま話題の「鬼滅の刃」で、場の景が目に浮かびます。

NO. 21 しわぶき一つ妻二つ変わりなし

新年のご挨拶ですか？夫妻ともに平穩無事とのこと。何よりです。

おめでとうございます。

吉岡誠山

特選

NO. 3 4 何為さば妻喜ばむ三日過ぐ

老いを感じ始めて、初めて妻の有難さを感じ、少しでも妻を喜ばそうと苦心している様子が感じられて、微笑ましく良い句だと思います。

選

NO. 13 歌留多取る手先鬼滅の刃めく

今年最高に売れた作品を、歌留多をやるときも何かと真似をするのも、ほほえましい光景として、受けますね。

NO. 23 賀詞交わす相手の無くて一人酒

例年なら、街に出ていけば誰かと会い、1杯となるところが、コロナの関係でそれもならず、一人さしく酒を飲むのもよくわかる光景です。

NO. 27 朱の雲や忘れものめく冬の暮れ

コロナの影響で、人間界だけでなく、自然界もおかしくなってしまったような光景が見られると、上手く詠いこんでいるなど感心します。

NO. 37 中学の庭に歓声ラガー達

世の中が、静かにひっそりと生活している中で、学校の庭から元気なラガーの元気な歓声が聞こえ元気づけられる。素晴らしい句である。